



北海道医療大学 学長
新川 詔夫

「新医療人育成の北の拠点」を目指す

本学は1974(昭和49)年、薬学部のみ単科大学として北の大地に産声を上げました。次いで歯学部、看護福祉学部、心理科学部と増設し、本年4月には「リハビリテーション科学部」(理学療法学科、作業療法学科)を新設する運びとなりました。これで5学部8学科となり、「医療系総合大学」としてさらに充実した構成になったと考えております。

医療系総合大学たる本学の目指すところは、「新医療人育成の北の拠点」です。この「新医療人」を一人ひとりの「個性差」を重視した新たな医療を行う人材と定義し、北の拠点を目指して様々な改革を行っているところです。

チーム医療の担い手となる医療人に

ご承知の通り、分子生物学の進展を背景に、現代は「遺伝子の時代」へと突入しました。それに伴い医学の趨勢は、「画一的な医療」から「個性差医療」あるいは「テーラーメイド医療」へと転換しつつあります。それを強く意識し、本学は「個性差健康科学」というコンセプトをいち早く立ち上げました。そして、「個性差健康科学研究所」を設置し、「個性差健康科学」という1年次必修科目を設定しました。この科目では、最先端の遺伝子研究に触れるのはもとより、個と社会、個と自然環境について学んだり、一人ひとりの個性差と人格の尊重に基づくこれからの医療や福祉のありかたを考えます。私を含め全学部の教員が持ち回りで講義をする、本学の最も象徴的な科目と言えます。

こうした知識や考え方を身につけたうえで「チーム医療」を担える人材。それがこれからの医療で真に求められる人材だと思います。

チーム医療を知るうえで、医療系総合大学には大きなアドバンテージがあります。本学には看護学科の学生が歯学部の人体解剖に参加したり、歯学部の学生が福祉マインドを身につけたり、臨床福祉学科の学生が薬理学を学ぶなど、学部学科の枠を超えた多数の授業

があります。チーム医療の担い手に必要な「多職種連携への理解」が深まるものと考えています。また、1年次の早い段階から現場を体験する「早期体験学習」も各学部で実施しています。

チーム医療においては、「コミュニケーション能力」が重視されます。その修得も大きなテーマです。「PBL教育」により自ら考え行動する力、他の医療スタッフと連携する力を養成しているのもそれを目指すもののひとつですし、地元住民の協力による模擬患者(SP)実習も実践力の習得を念頭に置いています。ボランティア活動もあります。例えば、知的障がいのある方々に学ぶ機会を提供する「オープンカレッジ」というイベントがあり、そこでは学生が企画した音楽や書道などの講義や実習を行います。そうした数々のボランティア活動は地域への貢献であると同時に、学生のコミュニケーション能力育成にも大きく貢献していると思います。

大学がまとまる「学生キャンパス副学長」制度

本学には「学生中心の教育と患者中心の医療」という行動指針があります。それに従い絶えず教育システムの改善・改革を行ってきたのが本学の歴史と言っても過言ではありません。文部科学省GPプログラム採択数が道内私立大学中第1位ということにも、それは表れていると思います。

例えば2009年には、本学の「『学生キャンパス副学長』との協働によるキャリア・就職支援」が、学生支援推進プログラムに採択されました。学生キャンパス副学長(Student Campus President:SCP)制度とは、学生力を生かした大学運営の改善や教育力の向上を目的として08年に導入した制度です。選挙で各学部より学生1名を選出し、1年間の任期で活動。授業評価や食堂改善プロジェクト、薬物乱用対策プロジェクトなどを率先して行ってくれていて、学生間にまとまりが生まれるよい制度だと実感しています。

学生中心の教育という観点でここ数年、力を入れているのは、学生の到達度に合わせたきめ細やかな指導です。近年では、学習指導要領の改訂に伴い、化学、生物、物理を十分に学ばずに入学する学生もいます。そうした学生が早期に苦手を克服し、将来立派な医療人として巣立ってもらうために、様々な努力をしています。薬学部には「薬学教育支援室」を設置し、専任教員を3名配置、基礎教育から支援しています。学生が自主的に学びに来っていますが、比較的混み合っていて、学生の熱心さを感じます。また、入学前教育、国家試験対策などを行う「eラーニングシステム」を独自に開発し、自宅や外出先で自由に学習できる環境を整備しています。こうした取組みは歯学部でも同様に行っています。

学生への経済的支援もますます欠かせないものになっています。「夢つなぎ入試」「歯学部特待奨学生」「薬学教育研究者育成奨学金」など、本学独自の制度をいっそう充実させていく所存です。

医療系総合大学として地域医療の中核人材を育成

医療系学部は、ここ北海道においても、さらに増加することが予想されます。こうしたなか、本学は道内私大唯一の医療系総合大学としてその価値をより一層高めていくことが重要だと考えています。今後は附属病院を整備・拡充し、できればリハビリテーションセンターも設置したい。そうして臨床の場を整えつつ、教育、研究の機能も向上させ、医療の高度化、複雑化に対応していきます。

北海道の医療は今、深刻な状況です。医療機関は札幌や旭川に集中しており、郡部は取り残されていると言っていい。それを見逃すわけにはいきません。そうした場所に自ら歩み出て、地域医療の中核となる人材を育成したい。さらには、人の多様性を理解し、弱者である患者さん個々人の病気や悩みに寄り添える医療人になってほしい。それが本学の切なる願いです。